

環境保全と再資源化への提言誌

月刊廃棄物

Monthly the Waste Vol.44 No.570

since 1975

■特集

もう1度考えよう! ごみ処理広域化

■特別寄稿 資源循環制度におけるコミュニケーションと企業の役割

■連載 横断的連携が生み出す“循環行政”に向けて

■シリーズ 全国縦断 事業系一般廃棄物搬入手数料の動向

Topic

民間

三重県初のバイオガス発電施設を建設

(株)大栄工業(三重県伊賀市)

(株)大栄工業は7月18日、三重県初となる食品残さをエネルギー利用した発電施設「バイオガスパワープラント伊賀」の竣工式を開いた。15年以上にわたって、堆肥化による食品リサイクル事業を営んできた同社は、新たに食品残さをエネルギー利用したプラントを建設。発電出力は500kW(250kW×2台)で、年間発電量は約400万kWhに上る見通し。FITの認定を取得しており、自家消費分をのぞく全量を電力会社に売電する。

同社の三谷工場(伊賀市)内に設置したプラントの直径は25m。大原鉄工所製の設備を採用しており、総事業費は約15億円とした。受入可能な品目は、▽汚泥▽廃油▽廃酸▽廃アルカリ▽動植物性残さ▽家畜ふん尿――の6品目で、処理能力は日量62・31t(24時間稼働)。発電に用いる原料は、青果物や肉類、魚かすなどの食品残さを中心に1日当たり50t受け入れ、そのうち7割が産業廃棄物由来、3割が一般廃棄物由来。徐々に一般

廃棄物由来を増やしていく考えだ。

受け入れた廃棄物は、破袋・破砕分別機で廃プラスチックや異物を取り除いた後、3日分(250m³)を保管できる原料調整槽に送り、加水調整する。一定量を発酵槽へ安定供給し、湿式中温発酵方式により、38℃の槽内温度を保つメタン発酵槽で25日間かけて発酵させ、発生したメタンガスで発電する流れ。

同社は今後、堆肥、発電利用に続き飼料化事業の参入を検討しており、県と研究会を立ち上げ、早期の事業化を目指している。また、三重県工業研究所と消化液の液肥活用について共同研究しており、「全量を液肥利用できるように実証・研究を重ねていく」とした。将来的に液肥を活用した農業を自社で手掛けることも視野に入れている。

同社担当者は、「食品廃棄物の成分・性状によって、飼料化や肥料、エネルギー利用できるものの違いを見極め、多種多様なリサイクル技術を確認すること



「バイオガスパワープラント伊賀」が完成

で、より高度な利用ができると考えている」と話した。W (本誌・青木)

